

タイトル： パンデミックを生きる（5）

実は、本コーナーを執筆させていただいています Dr.本多とは、視覚障害者でもあるのです。もう、全盲になって6～7年経ちます。目は見えなくても医師の知見を武器に某検診センターで働いています。

新型コロナウイルス感染症対策が視覚障害者に及ぼした影響は、前回お話しした視覚障害者の場合とは真逆です。まず、そもそも視覚障害者は「物体（あちこち）に触ることで情報を得る」ということに付きます。私は60歳近くで中途失明となったため、指先の感覚が鈍く点字も使えませんが多くの視覚障害者は街にたくさんある点字を利用しています。これはまさに探しながら触ることが命です。

また、点字を使えない私のような「ダメ盲人」も人と会い親交を深めるためには握手は重要な挨拶ですし、欧米風のハグもこれまではしてきました。これができないと相手との会合が実感できません。日常、一般の人が気づかない「アイコンタクト」が意思の疎通においていかにかたいせつであるかを失ってみて初めてよくわかりました。

というわけで、コロナ大流行の現在は、私は極力我慢していますが（笑）、握手されていやな思いをするのは正眼者のほうですからね。さらに付け加えるとすると、簡単な外出でも視覚障害者は階段の手すり、エスカレータの手すり、電車の吊革や、掴まり棒等々つかまらなければならないものばかりです。そのあと顔を触らなければよいのですが、無くて七癖、うっかり顔を触るものです。家内と障害者用の多目的トイレに入っても手を触れないようにするにはかなりの緊張を強いられます。

前回お話ししましたように、ズーム(Zoom)などによるテレビ会議は視覚障害者の追い風とはなりません。私も昔の仲間とズーム呑み会をやりますが、ズーム自体が視覚障害者用のソフトに対応しておらず家人の手助けを借りなくてはなりません。それさえできれば確かに「外出しなくていいこと」は盲人にも「安全」を提供してくれていることは事実なのですが・・・。

そう言えば、前回のズーム会議で視覚障害者さんたちは最近周囲の人たちがたいへん親切になって感謝していると発言されていましたが、これも錯覚。視覚障害者の場合は様子が反対です。視覚障害者は「ヘルプサイン」として「白杖」を上高く掲げることになっていますが、この頃は周囲の誰も声を掛けてくれないと聞きます。やはり、視覚障害者へのサポートは、タッチして触れることが必須となります。そのあたりがネックになっているようです。

ソーシャルディスタンスですね。このためか盲人の駅ホームでの転落死事故も起きました。コロナ騒動のなかの悲しい事故でした。ニュースになったのは氷山の一角だと聞きます。

私個人としては、ひとりで外出できないのでそこは安全ですが、これからは握手の代わりに TV で各国首脳がやっているという互いの前腕を軽くタッチし合う新方式を採用してみようと思っています。世界中の多くの人々の生活習慣を変える力が感染症にはあるということですが、また世界同時に同じ習慣を獲得するというのもデジタル機器の発達した現代ならではの人類の知恵と思えばたいしたものだなあと感心しきりです。なんでもポジティブに考える、それが私たちひとりひとりの武器ですね。

2020年10月5日（月） 本多